様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２２　年　５　月　２６　日現在

研究種目：特定領域研究
研究期間：２００５～２００９
課題番号：１７０８３０２３
研究課題名（和文）　寧波をめぐる絵画と人的ネットワーク

研究課題名（英文）　Paintings Involving Ningbo and the Relevant Human Network

研究代表者
井手　誠之輔（IDE SEINOSUKE）
九州大学・大学院人文科学研究院・教授
研究者番号：３０１６８３３０

研究成果の概要（和文）：本研究は、寧波という場で流通・集積されてきた絵画が、中国の美術文化の歴史でどのような意義をはらみ、さらにそれらを受容してきた日本で、いかに規範とされ変容さてきたのかを、そこで活動した人々のネットワークをたどることで、具体的かつ総合的に明らかにしようとした。研究会や２度にわたる国際シンポジウム（九州国立博物館、2006年度及び奈良国立博物館、2009年度）における議論をとおして、研究課題を多くの研究者間で共有化し深化させ、研究成果を、最終年度の2009年夏、奈良国立博物館で開催された特別展『聖地寧波』において、集約的にまとめて報告した。展覧会を通して寧波に関わるビジュアルイメージを社会史資料として活用するための基礎を確立することができたことは大きい。

研究成果の概要（英文）：In this research particularly focusing on the viewpoint of human networks, we tried to clear the historical meanings and functions of the paintings which had been produced and circulated around Ningbo from the Five dynasties to Ming period. Through the discussions at workshops and twice international symposiums held at Kyushu National Museum (2006) and the Nara National Museum (2009), the topic has been widely shared and deepened among the researchers and all the fruitful results of the research were integrated and reported in the exhibition at the Nara National Museum in the summer of 2009. It is worth to say that the exhibition made a basis for the utilization of visual images as eloquent documents for social history of Ningbo.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００５年度	5,400,000	0	5,400,000
２００６年度	7,800,000	0	7,800,000
２００７年度	7,800,000	0	7,800,000
２００８年度	7,800,000	0	7,800,000
２００９年度	7,800,000	0	7,800,000
総　計	36,600,000	0	36,600,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史
キーワード：寧波仏画、雪舟、呉越国仏教、栄西、重源、史氏一族、ネットワーク、唐物

１．研究開始当初の背景

寧波をめぐる絵画は、宋元時代の仏画をはじめ、明時代の世俗画に至るまで、その優品が長らく日本で伝来してきたため、従来、日本美術に与えた影響という側面から、一元的にみられる傾向があった。しかしながら、寧波で制作された仏画が典型的に示しているように、こうした絵画の制作は、本来、地域社会の産物であり、それらが、さまざまな日中文化交流を通して、日本に伝来し、規範的な役割を担ってきた。本研究は、従来の日本からの一方的な視点を相対化し、地域社会や日中間を往還した人々などの人的ネットワークに注目しながら、寧波をめぐる仏画の多様なあり方を明らかにする必要性から構想されるに至っている。

２．研究の目的

本研究は、南宋時代から明時代における時期について、寧波という場で流通・集積してきた絵画が、中国の美術文化の歴史でどのような意義をはらみ、日本でそれらがいかに規範とされたかを、寧波という場で活動した人的ネットワークをたどることで明らかにする。とくに、これまで等閑視されてきた僧侶や使節・文人士大夫間における注目すべき関係性や個々の場の機能について詳細な検討を行い、絵画作品の歴史資料としての意義を明らかにするとともに、イメージの解読を通して、日中間における共有と差異の諸相を動的かつ有機的な関係性の中で再定位し、東アジア絵画史の実践的なモデルを提示することを目的としている。

３．研究の方法

具体的な研究方法については、以下、(1)国外調査、(2)国内展覧会との連携、(3)研究会の開催の３つの項目に分けて報告する。

(1)　国外調査

・中国浙江省調査

寧波地域を中心に現地踏査を行った。寧波仏画の仏画師たちの居住した石板巷地域を確認したほか、仏教美術と関係する場（延慶寺、天童寺、阿育王寺、東錢湖、天台山）を訪れて資料収集を行った。

・韓国・台湾調査

韓国の国立中央博物館、リウム美術館、東国大学博物館、仏教宝物博物館等で、高麗、朝鮮王朝時代の仏教美術や世俗絵画について調査、台湾では国立故宮博物院にて浙江省に起源する明代浙派系絵画について調査した。

・北米調査

アメリカのメトロポリタン美術館、フリーア美術館、ボストン美術館を中心に寧波仏画、日明交流関係絵画の調査を行った。とくにボストン美術館とフリーア美術館では、大徳寺伝来五百羅漢図の中の 12 幅について銘文の光学調査による映像化に成功した。

なおカナダのロイヤルオンタリオ美術館では、南宋の仏像の発見があった。

・ヨーロッパ調査

スイスのリートベルク美術館、フランスのギメ美術館、ドイツのケルン東洋美術館で寧波仏画及び朝鮮王朝仏画、日明交流関係絵画の調査を行った。リートベルグ美術館で江南の木彫仏像、ギメ美術館で雪舟筆天橋立図原本にもとづく模本、ケルン東アジア美術館で新出の朝鮮王朝絵画をそれぞれ確認した。

(2)国内展覧会との連携

美術資料を歴史資料として、より活用するための方策として、以下の展覧会の企画に積極的に参加した。

・『明代絵画と雪舟展』根津美術館（2005 年）
・『大勧進　重源展』奈良国立博物館（2006 年）
・『宋元仏画展』神奈川県立歴史博物館（2007 年）
・『朝鮮王朝の絵画と日本展』栃木県立美術館、仙台市博物館、静岡県立博物館、岡山県立美術館で巡回開催（2008 年～2009 年）
・『聖地寧波：日本仏教１３００年の源流―すべてはここからやってきた―展』奈良国立博物館（2009 年）

(3)研究会の開催

企画参加した主な研究会

・国際シンポジウム「寧波の美術から海域交流を考える」（文化交流部門調整班と九州国立博物館が主催）2006 年 12 月 16 日・17 日　会場：九州国立博物館

口頭発表

井手誠之輔「寧波をめぐる場と美術」
谷口　耕生「栄西の入宋と東大寺復興」
藤岡　　穣「鎌倉彫刻における宋代美術の受容」

司会

板倉　聖哲、第一セッション：入宋僧と寧波文化
島尾　　新、第二セッション：遣明使の視界

・特別講演会「浙派」（寧波絵画班主催）2008 年 1 月 24 日　会場：東京大学本郷キャンパス工学部 8 号館 7 階 736 号室

台北故宮博物院書画処の王耀庭氏、林莉娜氏、

頼毓芝氏を招へいし、研究発表とディスカッションを行った。
王　　耀庭「追索浙派-國立故宮博物院藏品的相關問題」
林　　莉娜　「明代宮廷書畫家供奉機構所在」
頼　　毓芝　「清宮收藏與浙派」
・国際シンポジウム「舎利と羅漢―聖地寧波をめぐる信仰と美術」（総括班と奈良国立博物館が主催）2009 年 8 月 8 日・9 日　会場：奈良国立博物館
口頭発表
谷口　耕生「呉越の仏舎利信仰と鏡像の伝播」
藤岡　　穣「呉越～北宋の羅漢彫刻について」
井手誠之輔「湖水への祈り―大徳寺伝来の五百羅漢図と東錢湖―」
司会
板倉　聖哲、第二セッション：大徳寺五百羅漢図とその成立背景
・第 38 回奈良国立博物館夏季講座（協力）2009 年 8 月 18 日～20 日
講演
井手誠之輔「寧波仏画の故郷」
藤岡　　穣「憧憬の宋代彫刻」
板倉　聖哲「出会いと別れ―東アジアの雅集図・送別図」

４．研究成果
①呉越国から南宋へと至る浙江地域における仏教文化の伝統と変容。この観点は、とくに彫刻の造形において、チュリッヒのリートベルグ美術館で確認した木造観音立像や杭州地域の石窟、東錢湖地域の史氏一族の墓前に並べられた石造彫刻の調査によって、当初の目論見以上に明確な道筋が明らかになった。また阿育王寺の舎利信仰は、呉越国の造像から南宋の羅漢図、日本の鎌倉時代の造像に至るまで大きな影響を及ぼしていたことを改めて確認した。
②大徳寺五百羅漢図を初めとする寧波仏画の解明。奈良国立博物館、東京文化財研究所との共同研究として、ボストン美術館とフリーア美術館で特殊撮影による調査を実施し、大徳寺五百羅漢図の現存する９４幅について銘文を映像化し、大徳寺羅漢図が、南宋の東錢湖地域における四時水陸道場の活動や東錢湖の浚渫事業と深い関係をもつことを明らかにした。寧波仏画は広く、南宋の寧波地域の社会史資料として活用しうるが、その典型的な事例として、多くの研究領域に今後、この羅漢図が活用されているための基礎となった。
③寧波地域の文人たちと東アジアのネットワーク。従来から、寧波の在地の文人士大夫たちが入明使と交流したことが知られてきたが、画師の雪舟の視点を、当時の東アジア全体の枠組において再検討するとともに、寧波地域の文人たちと朝鮮との関係性についても視野を広げ、とくに金湜の重要性をあらためて喚起した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計 19 件）

① 島尾新、雪舟筆天橋立図論の序、多摩美術大学研究紀要、24号、査読有、2010年、1-15頁
② 板倉聖哲、東アジアの瀟湘八景―朝鮮前期文人の視点から、論集・寧波をめぐる絵画と人的ネットワーク、査読無、2010年、73-84 頁
③ 板倉聖哲、作品紹介 明・陶佾「虎図」（京都・報恩寺）、論集・寧波をめぐる絵画と人的ネットワーク、査読無、2010 年、85-89 頁
④ 島尾新、もう一つの天橋立図―ギメ美術館蔵本について、天開図画、査読有、7号、2009年、1-19頁
⑤ 板倉聖哲、中世日本が見た中国絵画－墨梅を例に、正木美術館編『水墨画・墨蹟の魅力』査読無、2009年、57-82頁
⑥ 板倉聖哲、絵画史における明宗朝―契会図と王室発願仏画を中心に、アジア遊学特集 特集 朝鮮王朝の絵画―東アジアの視点から、120号、査読無、2009年、57-82頁
⑦ 井手誠之輔、大徳寺伝来五百羅漢図試論、聖地寧波―日本仏教美術1300 年の源流（展覧会図録）、査読無、2009年、254-259頁
⑧ 谷口耕生、聖地寧波をめぐる信仰と美術、聖地寧波―日本仏教美術1300 年の源流（展覧会図録）、査読無、2009年、6-16頁
⑨ 藤岡穣、図版解説　木造菩薩立像、国華、1368号、査読有、2009年、22-26頁
⑩ 井手誠之輔、口絵解説 諸尊降臨図、国華、1353号、査読有、2008年、22-28頁
⑪ 島尾新、イマージュのなかの江南－雪舟が描いた金山寺を中心に、中国―社会と文化、23号、査読無、2008年、38-65頁
⑫ 井手誠之輔、時空の旅人―宋元仏画をめぐって、特別展『宋元仏画』カタログ（神奈川県立歴史博物館）、査読無、2007年、9-23頁
⑬ 井手誠之輔、図版解説 大迦葉図、國華、査読有、1392 号、2006 年、37-39 頁
⑭ 島尾 新、会所と唐物－室町時代前期の権力表象装置とその機能、シリーズ都市・建築・歴史４ 中世の文化と場、4巻、2006年、80-99頁

⑮ 板倉聖哲、図版解説 胡舜臣筆 送郝玄明使秦図巻、國華、査読有、1392 号、2006 年、48-50 頁
⑯ 谷口耕生、重源の文殊信仰と東大寺復興、「大勧進重源―東大寺の鎌倉復興と新たな美の創出」特別展カタログ、査読無、2006年、35-40頁
⑰ 井手誠之輔、像主の表象―見心来復像の場合―、仏教芸術、282 号、査読有、2005 年、13-33 頁
⑱ 島尾新、雪舟と明代絵画―亀裂と同調、明代絵画と雪舟（根津美術館展覧会カタログ）、査読無、2005 年、7-14 頁
⑲ 板倉聖哲、成化画壇と雪舟、明代絵画と雪舟（根津美術館展覧会カタログ）、査読無、2005 年、19-24 頁

〔学会発表〕（計 19 件）
① 板倉聖哲、南宋院体山水画における筆と墨、シンポジウム「筆墨の美―水墨画の本質に迫る」、静嘉堂文庫美術館、2009 年 12 月 6 日
② 井手誠之輔、東アジア地域における阿弥陀画像の諸相、東亞文化意象形塑―第十一至十七世紀間中日韓三地的藝文互動國際討論學術會議、台湾中央研究院歴史語言研究所、2009年9月11日
③ 板倉聖哲、東アジアの瀟湘八景－朝鮮前期文人の視点から、東亞文化意象形塑―第十一至十七世紀間中日韓三地的藝文互動國際討論學術會議、台湾中央研究院歴史語言研究所、2009年9月11日
④ 藤岡穣、憧憬の宋代彫刻、奈良国立博物館夏季講座「寧波をめぐる信仰と美術」、奈良女子大学、2009 年 8 月 19 日
⑤ 板倉聖哲、出会いと別れ―東アジアの雅集図・送別図、奈良国立博物館夏季講座「寧波をめぐる信仰と美術」、奈良女子大学、2009 年 8 月 19 日
⑥ 井手誠之輔、寧波絵画の故郷、奈良国立博物館夏季講座「寧波をめぐる信仰と美術」、奈良女子大学、2009 年 8 月 18 日
⑦ 井手誠之輔、湖水への祈り―大徳寺伝来の五百羅漢図と東錢湖―、国際シンポジウム「舎利と羅漢―聖地寧波をめぐる信仰と美術、奈良国立博物館、2009 年 8 月 9 日
⑧ 藤岡穣、呉越～北宋の羅漢彫刻について、国際シンポジウム「舎利と羅漢―聖地寧波をめぐる信仰と美術、奈良国立博物館、2009 年 8 月 9 日
⑨ 谷口耕生、鏡像と呉越の仏舎利信仰、国際シンポジウム「舎利と羅漢―聖地寧波をめぐる信仰と美術、奈良国立博物館、2009 年 8 月 8 日
⑩ 板倉聖哲、雪舟所見／所現的明代絵画、「東亜視野下的浙派」小型研討会、台北故宮博物院、2008 年 12 月 2 日
⑪ 板倉聖哲、朝鮮王朝の絵画と日本―前期作品と中国絵画について、『朝鮮王朝の絵画と日本－宗達、大雅、若冲も学んだ隣国の美』展講演会、2008年11月27日、栃木県立美術館
⑫ 井手誠之輔、高麗仏画における中国の受容―鏡神社本水月観音像を中心に―、韓国仏教美術史学会、通度寺聖寶博物館、2008 年 11 月 8 日
⑬ 藤岡穣、鎌倉復興造像と縁起、研究集会「南都復興における縁起と美術」、春日大社景雲殿、2007 年 12 月 21 日
⑭ IDE SEINOSUKE, Jianxin Laifu and Iko Tokken :The Transmission of Literati Culture through the Mediation of Chan-Zen Buddhism, Re-presenting Emptiness :Zen and Art in Medieval Japan, Princeton University, 2007年4月14日.
⑮ SHIMAO ARATA, Painting as Document: A Study of Wang Xizhi Writing in a Fan, Re-presenting Emptiness :Zen and Art in Medieval Japan, Princeton University, 2007年4月14日.
⑯ ITAKURA MASAAKI, Ma Yuan’s Chan Patriarchs and the Representation of the Chan Patriarchy in the Southern Song Imperial Court, Re-presenting Emptiness :Zen and Art in Medieval Japan, Princeton University, 2007年4月14日.
⑰ 井手誠之輔、寧波をめぐる場と美術、国際シンポジウム「寧波の美術から海域交流を考える」、九州国立博物館、2006 年 12 月 16 日
⑱ 藤岡穣、鎌倉彫刻における宋代美術の受容、国際シンポジウム「寧波の美術から海域交流を考える」、九州国立博物館、2006 年 12 月 16 日
⑲ 谷口耕生、栄西の入宋と東大寺復興、国際シンポジウム「寧波の美術から海域交流を考える」、九州国立博物館、2006 年 12 月 16 日

〔図書〕（計 2 件）
① 井手誠之輔、島尾新、藤岡穣、板倉聖哲、谷口耕生、『論集・寧波をめぐる美術と人的ネットワーク』（非売品）、2010 年、140 頁
② 東アジア美術文化交流研究会編、井手誠之輔、藤岡穣、谷口耕生ほか執筆『寧波の美術と海域交流』、中国書店、2009 年、229 頁

〔その他〕
ホームページ等
1)http://www.l/u-tokyo.ac.jp/maritime/
2)http://www.lit.kyushu-u.ac.jp/aesthe/sympo2006/sympo_index.html
3)http://www.let.osaka-u.ac.jp/arthistory/tobi/09sympo/0902organization.html
4)http://www.narahaku.go.jp/exhibition/2009toku/ningbo/ningbo_index.html

６．研究組織
(1)研究代表者
井手　誠之輔（IDE SEINOSUKE）
九州大学・大学院人文科学研究院・教授
研究者番号：30168330

(2)研究分担者
島尾　新（SHIMAO ARATA）
多摩美術大学・美術学部・教授
研究者番号：80170926
藤岡　穣（FUJIOKA YUTAKA）
大阪大学・大学院人文科学科・教授
研究者番号：70314341
板倉　聖哲（ITAKURA MASAAKI）
東京大学・東洋文化研究所・准教授
研究者番号：00242074
谷口　耕生（TANIGUCHI KOSEI）
奈良国立博物館、学芸課、研究員
研究者番号：80343002